

危なっかしい蝶の羽なり黄揚羽は黄揚羽なりの恐れ
あるらし
宇都宮とよ

飛んでいる黄揚羽である。どこへともろうか迷っている感じの飛び方なのだろう。迷うような飛び方があるように迷うような生き方もある。一首、ふと、人生を思わせる一首にしあがっている。

色どりのポコポコ並ぶデパートの帽子売り場にある
夏の音
朝倉恵子

なるほど帽子売り場は、冬よりも夏の方が色取りもにぎやかで、形もバラエティーや豊かになるようだ。そしてそのバラエティーの豊かさこそが「夏の音」だということだ。「色どりのポコポコ並ぶ」というのは、なかなか。感心させられた。

人と人の距離とほくなり雨の日は木立の声が少し近く
づく
高山邦男

自粛の日々のおかげで、人と人との距離は遠くなった反面、人と自然との距離が多少近づいた、とこの作者は見る。今月の一連に「カッコーのこゑを初めて生で聞く自粛で静まる市の中の家」という作もあった。

身を振りて手を振りて話が続ければ鼻から下しか見
えぬと言はる
梅原ひろみ

まだなれないオンライン会議体験に取材した今月の一連。失敗やちぐはぐさをふくめて、あたりしい体験を作者が新鮮に受けとめている感じが伝わってきて、たのしく読めた。この一首、六個も動詞を使ってあわただし感じを伝えている。

短歌の現在

No.473 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

紫陽花色のフェイスシールド店内を歩く映像 風物
詩のごと
久保富紀子

場所がどこなのかは不明だが、視野に何人かが歩いて
いるらしいから、繁盛しているデパートとかコンビニと
かを思い浮かべればいいのだろう。マスクはまあ日常的
だが、フェイスシールドの人物が視野に一度に十人も入
るなんていうことは想像もできなかった。この「風物詩」
は「日常の向こう側」の意味にとっていいだろう。

降り始める春雨にすぐ気がついて自動車通勤二日
目の朝
海老原愛

就職してはじめて通勤するようになって、何でも新しく
見える・思える新鮮な気持ちとうたった魅力的な今月
の一連。ポツポツきたばかりの小雨でも、フロントガラ
スにあたれば鮮明である。

暴動の夜が明け同じ町角にデモが始まるアメリカの
朝
アダムス理恵

白人警官による黒人殺害にかかわる暴動とデモだろ
う。われわれ日本にいる者はニュース映像で見ただけだ
が、現場はやはり空気がちがう。「……夜が明け同じ
町角に」に、その空気が読める気がする。

土色の流れとなれど白波を逆立たせをり鴨川の梅雨
服部 崇

数年前に、大增水した鴨川のほとりを歩いたのを思い
出す。記録的な雨量で増水し、流れが通常より圧倒的に
早くなっていった。この歌の通り、えつ鴨川こんなに濁る
の、と思うくらい土色に濁っていておどろいた記憶があ